



伊勢文

東遊記後編卷之二

龍燈

南谿子著

越中

初川郡小眼目山と云る寺あり眼目山と云く

サツク

ワ山と云くまじけハ初次宗肯と云く道元禪師の

才子大徹禪師の基なりけ大徹禪師此山臥居まじ

村山神龍神助力して多々の奇持ありし今小

里毎年七月十二日此秋ハ眼目山ノ庭の松林梢ノ松大の

けりまらハ立との絶頂より飛来りまらハ海中より飛

来り皆松ノ梢ノまらハ是成山松林と云くい

つりの人と例年尺り事と世小龍燈と云く海中より火

923
4



のありあむ多しどもい寺のごとく心持遊地を交ふあり
く松乃稍小るる希有るものなりやといふ越前の敷
常の庭も流地アツクヒの松とて例年正月元日の夜か
らゆあるとまわりの人ハ皆見物なり

新写

越後風新写ハ信濃川シノノの川と海合々海入るあり海
口をくのとて武里乃所ハ川幅廣き事キ里武里から海
とくくぬのこく入海のごとく岸より岸まで水深々
浅水といふものなり千石武石の大船といふもづくまで
も自中出入りも海小川流すも八日お舟一ともいふ魚

川幅の廣きも天下無双ともいふ一此の川信濃川といふ
此川の水ハ信州犀川流摩川とてこまき光寺の色也も
既小海を天流川程の大なりとしを里新写までいふ六
十里波魚くこ間大小川と流さるゆ急かくらりの大の
と解りたれは成後ハ地勢平坦なるゆ急なくこ穏ありて流
にひびくもゆるも流なり越して成後流すもく皆ニコ土由系
川のおもも柔中へ崩入り次第なりはまざる水勢ゆるくこ
る小大小崩らるるも時一も水ハ常小黄色小濁まらる余ハこ
系と云ふより新写と十里の距離ハ信濃川の院毎りあり
ゆゑ此川の体委度見たりも是の減下よりハ新写を十

亦星と四百石核社の川舟常小一日の上下を渡小運漕小使
利なり事と海内又がる川なり生大なる事日本才一なる
る小まなきるうらぶら北陸僻遠の地小ありて河小川平
穏して舟好ぶるゆゑなりて余新得乃断より又小和より
平く芝田の本橋といふ所をみ里うち成け川の入江くして
ひとあふ小まなる度小亦ハ武里小舟ありとあり狭く入の西
終小武三十石の取とあり是ハ本川筋小ありとるゆゑなり流
も勢よくして流きぶるごとくけ日付小晴天をてあ岸の景色
うたりく入江く小蓮の葉もあは夏月水水面一様の花小
て見事なる事いかけん事と我新得の町より舟は浮れ

荷華と賞一又ハ納涼なりと亦荷華といふお船中より四方
尺後とふあもと東より六七十里と尺後してお船あふ
ハ武里の里の所小佐渡心尺ゆち方ハ奥州會津の心尺折らぐ
のどく四面お舟さるる地也北海の廻船出入り夫漢りハ
城及才一の警華の作也てま橋ありして小まやう小又城後一
國のあふおけ渡小あゆゑ遠大名藏多く建小北方吾國の事
ゆゑも小舟の色ハ河あり氷雪と舟の廻り船(陸地を吾國
海と八十月より三四月はまてハ船と出り事あはハ小ハ夏一季
位べきおといふべし

三馬屋



卷之二

五

の事なげろし由家内小属荒く物と我とあひなきはま
 と飯小まじく小属小飼ひ即正と取つて座先小控り
 小まを宗の執りみまうく彼属食ら小二十ての
 へつろ属あまバ執とを毒小あつて死つり親執とまら
 ある小伝大お恨之婦娘小たけく急くせうく口くして
 粉白あまうけひお死せり又主次の娘小とら付く只月
 けろりのちふ二人の娘死しぬき父母を怨みて死し
 庭先くまわくしひくろ属と控りつら小わて教えん
 とのゆやあまうけつらに母みじさばり食ひて死し
 是元来はが子のあまうけつらに母はけ方のまじくこのあふん

のけ方の愛子三人までとを殺すとはいふ事とや高生
 とまじくあまうけつらと恨つらとあま小は親執け
 乃即ちあまうけつらとあまを望み先小老執と足死し居
 ころ百姓主婦をゆかんと取れけ方より恨つらとソク
 小を死つらまじくつらと死しつらとあまつら石段のまじ
 なるとあまがさほひおとつらとあまを執りて主婦と刺殺
 一鬼と賣り家業と控り西屋あまを執りてあまをけ春を
 者ひあまもあまうけつらとあまを執りてあまをけ春を
 付付ふ

諸河名

奥州南波の地は日本東北の極うゆえは小野郡にありたれ
どもそそくも驚かすて又其神佛の伝は純中伊勢を
神多と傳く伝はいさう余もこの地と男也とも云ふ
老る余我ををやとて小余かふもさうこの物傳小我
祖又代と傳はる名付といふ余と驚かすてさうと云り
方の父のいふもはがらるも名をさうもて伊勢の父祖は
るる我傳の人もと云いしふるもさうと云はるは傳
中余もその名其が祖又余宮とてその道とては傳の
系を五風と見らびらる小余中波河は冠よさへは
とていひるもゆつてのほもは傳彼もゆつてはるるも

つうらの名は波河と付く一室と傳ぬ我父も亦も父の名
がきは同く波河と名をぬ某と又波河と名をぬと
在所の名はある大なる名ありとて、あつるも其は
又曲ともありとてり余も見えぬも余の波河
せり波河もその名も彼地の傳はるはと云ひや
ゆへ

二本木草

又南波の地の廣大なる色ゆして何もの事といふも此
地の廣さふはすきなりは七の戸をさふ二本木草
いふも系ありとて年々たるも系も四方月ふはるるの

抗師三統と西海の今ふお持せり人皆誰の輝といふ

鮮珠

ふらうあり成事のしりあまきとら成珠といふた玉より
 一りり市和が玉合浦の原をいひ侍とく名もさるる
 と教し字え得るをささきの實ともしり中一君子温潤の徳
 たりとあしはきり我物には昔より格あふ名もさるる
 ず神代小曲むきとく今を家よりう堀おとるる
 珠愛とてふおとるる又珠とて名もさるる
 只越後小在りは新厚のくう修り一はけをささめて
 小福厚といふとあけけ厚小珠とくくたるる感あつて

たさこ之四尺よりちりもわらん月明りりまる夜はわつ一は貝は
 と開ふと珠たささきの経とわらんともんさく暁の明
 星のおちるごとく光明輝るごとく水面わささめく人
 是れおとづく財は忽ち只成冨く水底に沈む或は長閑さ
 照づる水とて去て射るごとくおとるる貝おとるる
 足らぬのもささたさ同い程なるとは品さつた貝とさるるおとる
 らぬののまじるとも昔よりある貝とくけおとるるわつたもの
 りぞくおとるる取事なり又あまらう程をく足らぬもの
 八行貝といふとさるる唐玉杯とくつたおの輝珠
 まるとは法ともの

け福海原といふ方は城は少く尤たある深きく竟り六七里
ふ能くして川の出水とをるがごとく一まかまも瀬急浮白蓮浮
るを中世浮びていついて城は少く浮とを付るののああり化
面うしてせきこののしは城塔は度玉のに曲の地は少く廣く
るふよとて志は少くとをるがごとく一まかまも瀬急浮白蓮浮
其中ふたの流りま玉地も平なりある川の流も急なり
あつては少くああり入るく浮りあつては少くああり是城は地
ろては少くあありといふ皆あ大くして少星之里四百里あり
六里四方なるともろ化のわに城塔くきくは度玉ありま
土地もろくああり川も急なり浮とを付るののああり入るく

あるや度玉にても城塔とて考ふる小洞を湖草が掘り
と湖といふ者則城塔の浮と同一極くはある皆長江小傍く
湖のま少方の地は地面もろくああり山もく険なりゆき
小黄河小湖のう事なり日ありといふ城塔の浮はろく化
うとせり修も羽の八郎浮常陸の鹿浦杯がし似たりが
そとありといふあり

養軒の詩

飛馬川の波浪尾國の雪羽州の鬼津粒の鉄湯をか
辛百古方のとと先ふ事なりありいふが旅中の艱難
ひのくさひささるるの事ありい呂具とて昔なりはひ

秘城のゆとごころ一う奥の代あく或夜の中の日も
むやうくとおぬらうて是れはさき湯とあつとごころの谷
川と陰浪のあつたけり又きり志んやうふ海をこし西の
きふあす乃途之のあんど一眠らんらとらふまにあくこ
しじういとおぬらうてやいままの秋うらうらふ年言ま
えきうく今いんや日百里と隔るをり清きその夜も
里い六七百里や宿するは程と隔るこちとごころゆをくす
ぬ事ある父といまをり今程い居るあうんここの事
とまじいりいあがりおと夜あつといひもさ長物もあ
まほきとい程とあつる危うし事をけり今いけりあ
卒しと危き事い使ふに命令してまもつたり又お許の老
父と違ふことあ瓜をま様とくさ社あつとを杯かしく弱
くごころうさ居るおや村を頼る小とらもしくは長物
あまきあがし

相携千里遠京畿旅館夜漏燈影微
窓外杜鵑聲切請君細聽不如歸

さあゆとら文字のせましく結不請方の道いささあひ
まさけられど実境小在うて実情瓜迷る小余と是成吟
して是を恨長然しとさう帰城いさく事とかなり
ぬ初家いおんとする時門生等皆後人と清おれまことる

具はるふいそく小のふしは絶倫小なるく才一丈路は志
 一、まきく小湯るべし相寄百千里の行程を色ばん弱く志
 足弱く者も痛の患苦あし一奉告といふ者ありし
 大酒より老いし一程急がりののりし一父母愛ある老の
 一其を許さる老いし一是等の事とあつた光具と
 一三、老ふぬ程一も程の財は城中よりあり居一又老
 一より少老は具といふ日向日より老居一老好と具と
 一是は貴なり余らあはせし一財肥後の琉球とあつた一とせ
 一馬井佐徳守の家小儒字修一の老小あり居るは
 一十日の月同居老と一八、一財は老乃老とあつた一修と余り

馬井と伴一老財老好後ひまるとせし一ふしは父
 日向とあつた一い、まきく漫遊の事とを公するまきく東
 一那小いし一他那小梅とつと終りも君父小石流して師
 一小使女の老とつとつし一小理小休一と一狂後小ゆりる事
 一之後養老日向小ゆりし事、父老流り姑念ありとつし
 一い、父老減老とつとつし、まきく一とつとつし一好幸は均能
 一あつた一老いしとつし一を財出さし後ひく九州より四里も押
 一酒り物老の功と終りる事、老父老悦する事あつた一封
 一の書とつとつし、行と我許し成ゆんまきく一の、い、由、老
 一へ、取、海、と、終、ひ、を、は、老、は、小、ゆ、り、る、事、あ、つ、た、後、り、と

馬井と伴
 十五

一歩のいひゆのまゝに事に向ひて言ひつゝ言ひつゝ
 のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 一歩のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 の年山のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 余のまじり一歩のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 河のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 くけのまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 橋のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 お七のまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の
 まはらのまじりやあまのまじりや一歩のまじり一歩の

くの親 ちまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの
 一はまののののののののののののののののの

東遊記後編卷之二

